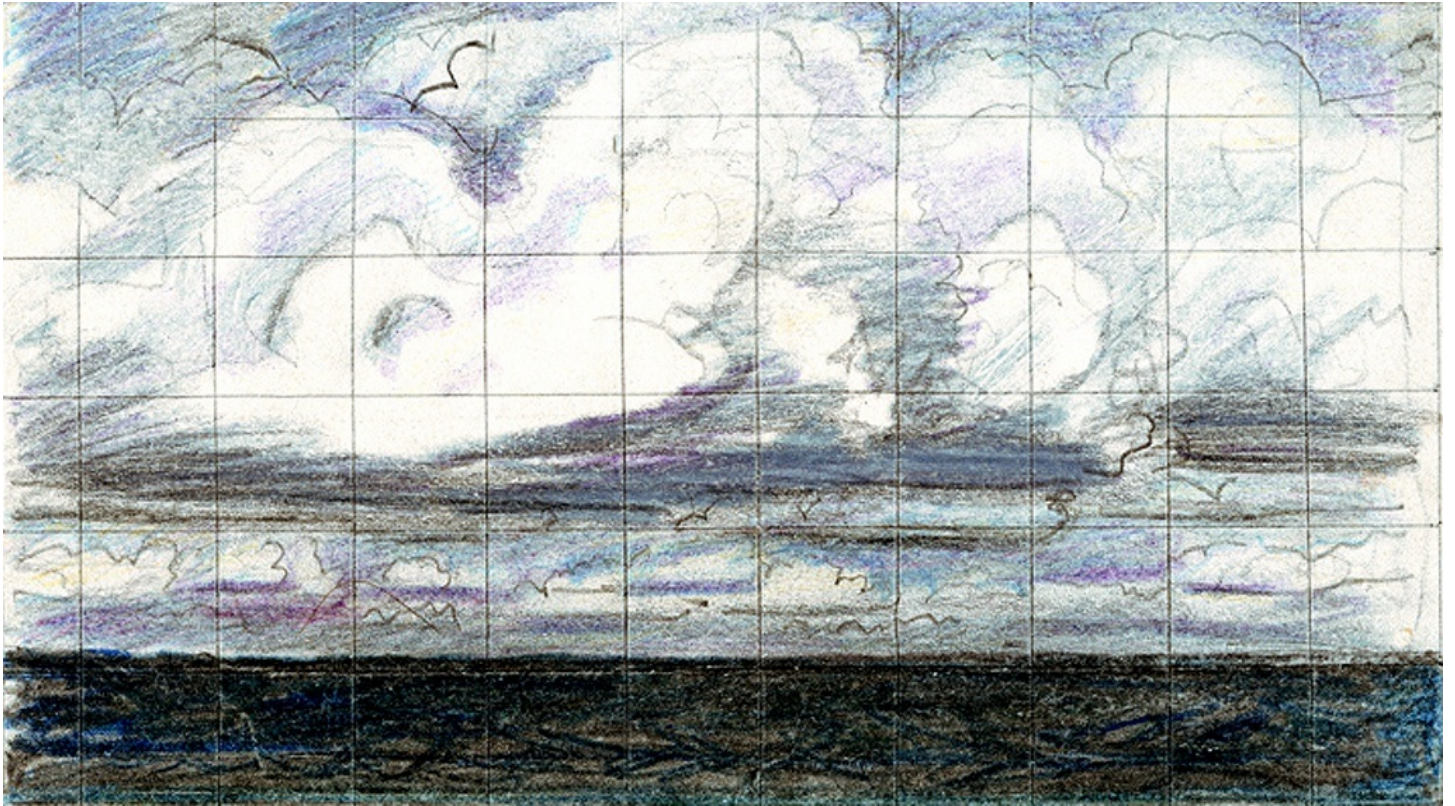




散文
遠い夏



夏の海のスケッチ（鉛筆・色鉛筆、画用紙）

あの夏の日、海を見下ろす小高い砂丘にボクは立っていた。ボクも小さかったけど、もっと小さな弟は、地面に座りひざを立て、肩ひもをかけた画板に向かって夢中で海の絵を描いていた。ボクは、その日の海のようなすが、いつも見ている、どこか緩慢で退屈な海とはまるで違って、それはまるで、何か異変が起こる前触れのような空気が、辺り一帯を支配しているように思えて仕方なかった。海の色も、いつも目にしている夏の明るい青に白い波、といったものではなく、ひたすら青く黒く深い海に思えた。急を告げるような、無数の細かな波頭のさざめきは、海底を、巨大な生物がのっしのっしと歩き回ったり、地球の銅底をゆっさゆっさと揺さぶって、ふりかぶっては一気に押し寄せるを繰り返す、いつもの単調な波ではなく、巨大収容所に収監された夥しい数の反分子の悪タレどもが、飯はまだかーって、それぞれが手持ちの小皿やら茶碗やらコップを、箸やスプーンで一斉に叩いているような、ささくれだったざわつく波が、数日のあいだ、朝から晩までわけもなくボクの心を急き立てた。それでいて空の真上だけはぼっかりと、昼でさえ星が見えるほどぬけるような濃い青でそして明るく、いまだかつて見たこともないほどの質量をもった積乱雲がボクらのまわりを取り囲んでいた。

見下ろすと弟はまだ絵を描き続けていた。夏じゅう、いつもすり傷だらけのうす汚れたようなボクとはちがい、やせた体で色白で、こんな暑さのなかでも、長袖の白いオープンシャツ姿で半分口を開けたまま、一心不乱に絵を描き続けている真剣な弟を見て、ボクは何故か苛立った。その日から数日、不穏の湿りと響きを帯びた潮騒は、ボクの理由のない苛立ちと同じように、途切れることなく、ずっと続いていた。そして海はその夏、別に何ごとも起きはしなかった。



あの頃すでに父はいなかった。別にいがい話をするわけではない。そもそも、父なんて最初からいなかったのかも知れない。モノ心がついた頃には、といった次元でもなく、もっと赤ん坊の頃、いや、それ以前、母の体内に、いや、母の子宮に着床した頃から父というものなどいなかったのかも知れない。

その後、いくたりかの父と名乗る人がボクの前に現れるようなことはあったが、いつも眩しい逆光の頃か夜の帳の中にだけ現れては消えて、顔を確認することはできなかった。

友達やクラスメイトは、夏休みじゅうほぼ不在だった。

静かな真夏の午後の午睡の頃、大きな楠の木のある神社によく行った。

騒音としか思えぬほどの蝉しぐれのなか、遊ぶといっても一人ではやはり所在なく、

地蜘蛛の巣を引っぱり出したり、あり地獄にアリをいれたりしていると、

頭上からボクの名を呼ぶ声が出て、見上げると背の高い男の人が立っていた。

振りおろされる逆光で顔もわからなかったが、覆いかぶさるその人の黒々とした影に、

別に怪しい人とも思わなかったし、親しげにボクの名を呼ぶことから、

パート休みの母を訪ねてきた、誰か友だちか親せきの人だろうと思った。

暑さと退屈の不機嫌さからボクは何も答えず、グズグズして下を見ていると、

「これお土産」といってボクに紙袋を手渡しそのままその人は立ち去った。

すぐに紙袋の中身を確認してみると、貝がらの標本が二種類と、

竜宮城のスノードームと、海ほおずきという得体の知れないものが入っていた。

お土産の意味は不明だったが、夏休みでも日帰りの海水浴にも行けない立場にあったボクは、

誰のなんの意図かは知らないが、そのとき無性に腹が立った。でもしばらくすると、

それほど怒ることでもないなと思ったボクは、それから二時間ほどして家に帰ると、

「母さん暑かったからさっきシャワーをしたの」と母がいて、

濡れた髪のまま、さっぱりとした様子で晩ご飯の用意をしていた。

ボクが「今日お客さんか誰か来てたの」と聞いたら、「ううん誰も」と母がいった。

夏休みが終わって、提出したボクの絵日記の8月初旬のある1ページには、クレヨンで橙色の太陽と、青空と白い雲をバックに大海原で泳ぐボクの姿、そして松原の見える海岸には、海の家やら西瓜やら、「氷」の旗やら、どこかで見たような、思いつく限りのものを想像で、ところせましと描き込んだのだった。少し寂しい思いをしながら。

秘密をあばくことができるのは母だけだった。もし誰かに詳しいことを聞かれたならば、絵日記と一緒に提出した貝の標本をもっともらしく差し示して見せるのだ。ボクは見栄っ張りでうそつきだ。今でもボクの人生は「絵に描いた海」だ。



「静」（画用紙に水彩、ガッシュ）

昔カヤックに凝った時期があった。はじめて手にしたそのモデル名は「流れ葉」といった。競技にでたり、日本中の川を下ってみたいといった目的などなく、ただ思いつきでやってみたいだけだった。自分の性格を思うと、装備一式揃えたものの一度きりということもなきにしもあらずで、どうしようかと悩んでいたそんなある日のこと、偶然あるメーカーのカタログに「流れ葉」という文字を見いだしたボクは、財布のことも、三日坊主の心配もたちどころに忘れ、衝動的にそのカヤックを購入してしまったのだった。なぜ当時その言葉に引かれたのかそれはまったく覚えていない。

陸からではわからない、カヤックからの四季の眺め。

まるで落人の隠れ家のような奇岩に囲まれた静寂の瀬場。

聞こえるのは、水琴窟的な水音と岸壁に反響する自分たちが引き起こす音や声。

どろっと粘性を帯びているかのように、不気味に渦巻く黒々とした淵。

岩場の湧き水は滝となりえず、岩間を吹き抜ける川風に、しぶきとなってふりそそぐ

。

パドルをデッキに置き、しばし伸びをしながら空を見上げると、

断崖にはさまれた青空は、川に沿って一本の道のように延びていた。

目をつむり流れに身を委ねてみた。使命を終え川面に落ちた一枚の葉のように、水面をゆっくりと流れてゆく……。

どれくらいの時が過ぎたのか、あれからずっとボクは眠ったまま漂い続けた。目覚めると、水の上に違いはないが、周囲はまったく見覚えのない風景だった。一体ここがどこで、どこまで流されてきたのか皆目わからなかった。ただ、流されはしたものの、彼岸に至らなかったことだけは確かなようだったが、水面に映った自分の顔は、シワやシミ、白髪が増えて顔はまるで別人だった。

マイブームは三年あまりで終わった。記憶に残ったのは、小さな滝や早瀬を乗り切った後の、理屈ぬきの爽快感と達成感。今も忘れることができない懐かしい思い出のひとつだ。あのような経験はもう二度とできない。そう思うと本当に寂しくなるのだ。それは体力的なことというよりも、あの日、カヤックで夢から覚めた時に見た、水面に映ったあの顔が今、洗面所の鏡の中にもあるからだった。

【雑記】湖の小さな棧橋



July.2010 びわ湖畔

この湖の小さな遊覧船の棧橋は、休日の周囲の喧噪をよそに、地方のローカル鉄道の無人駅のように、夏の青空を切り取って、一枚の絵葉書のような佇まいを見せていた。それは、写真か映画で目にしたことのある、どこまでも続く白く輝く砂浜に長く伸びた木の棧橋といった、芒洋たる外国的印象のものではなく、岸边は水中に根をはる柳や蒲などの水辺の草木や葦原が覆い、護岸のための堤もない各地の水郷地帯と同じような、日本の原風景的趣に満ちたものだ。耳をすませば、わずかな風にサラサラと音をたててたなびく葦原とあまりにものどかな気配に、疲れ気味の私は白日夢とまではいけない、うたた寝の想像世界へと早々と駆りたてられていった。

それほどの観光スポットとは思えない、この棧橋の切符売り場の詰所には、まるで次の舟が来るま

での時間、店番を頼まれた少年が、退屈と風通しの心地よさから机の上でうたた寝をしてしまう。結婚して遠くに行ってしまった姉さんの夢を見ている……。あと数日もすれば、夏休みをここで過ごす従兄弟たちがやってきて賑わうこの岸边も、今はまだ夏の午後の静けさに守られていたが、どことなく気がなさそうに寄せては返すおだやかな波音と、少年のかすかな寝息や木のそよぎ、羽虫やかえるの鳴き声がひそやかに加わって、さらに潮の匂いとも川の匂いともつかない水の匂いが風に漂いきては、自らの幼少時代とかさなりながら、このうたた寝的空想はさらに先へと膨らんでゆくものと思われたその時、水辺で遊ぶ子供たちの声で一瞬にして現実を引きもどされ、私のささやかにしてうたかたな幸福世界は、あえなくもわずか数秒で幕を閉じ、虹色に輝く透明の球体に閉じ込められて夏の空へと消えていった。

(ああ、このまま何もしたくないんだな……)